第十二回ふくふく童話大賞「大賞」

気がつけばラブレター

マモルは来る日も来る日も手紙を書いた。ミーサに手渡すための手紙であった。ミーサは真栄城美沙子といってマモルのクラスメートである。活発で頭のいい女の子で、マモルにとっては、なぜか気になる存在でもあった。だが、その彼女はもうすぐ遠い町へ引っ越すことになっていた。マモルの住む糸満から車で二時間もかかる名護の町であった。

三週間前に担任の国吉先生からその話を聞いたマモルはとてもショックを受けた。そして、彼女のために手紙を書こうと思いついた。転

校していくのだからお別れと励ましのメッセージを伝えたかった。ところが、その手紙がマモルにとっては問題であった。なにしろ作文が苦手な上に、字がとても下手なのであった。だから、書き直しばかりでいつまでも手紙が完成しなかった。本当なら言葉でメッセージを伝えれば簡単で済むのだがマモルにはそれができなかった。なぜかミーサとだけはうまくしゃべれなかったのだ。（やはり、手紙しかないか……よし！）

何度もそう決心して便せんに向かうマモルなのだが、何日たっても満足のいく手紙ができなかった。たまには、字の汚さに自分でもウンザリしてしまうことすらあった。悔しいけれど、三つ年下で小学二年

生の弟のオサムの方がましだと思った。
（平仮名はまだいいとして、漢字はメチャクチャだな、もう。だからといって平仮名ばかりの手紙というのも格好が悪いし……しょうがない、もう一度書き直しだ）
と、やっているうちに、とうとう彼女の引っ越しを二日後に控えた夜になってしまった。
（ミーサが学校に来るのは明日で終わり。だから、手紙を渡すチャンスは明日しかない。わっ、大変だ！）
マモルは必死になって手紙を書いた。字を気にしている場合ではなかった。とにかく、今夜中に書かなければと、真剣になった。そして、

いつもなら寝ているはずの時間になって、なんとか書き終えることができた。マモルは、その手紙を読み返した。

〈ミーサへ。名護の学校に転校してもがんばってね。ミーサのことをいつまでも忘れないよ。だから、ボクのことも忘れないでね。今だから言うけど、ボクはミーサのことが好でした。簡単だけど、じゃ、このへんで。元気でね。さよおなら　ブーッ〉

読んでみると本当に簡単な手紙であった。こんな簡単な手紙を書くのに何週間もかかったなんてとても信じられなかった。しかし、内容は上出来だと思った。字の汚さには多少の不満があったが書き直す気はなかった。だいいち、そんな時間もなかった。

（手紙はこれでオッケーと……やっぱり、記念にプレゼントも付けた方がいいよな）

そう思って机の一番上の引き出しを開けた。そこはマモルの宝箱であった。宝物といっても、いろいろなオモチャの他に、壊れた腕時計、書けない万年筆、ビー玉、手製の紙鉄砲、海岸で拾った貝殻、最新のゲームソフト、使い終わった乾電池、戦車のプラモデル、お菓子のオマケなどである。その中から彼女が気に入りそうなものを選ぶのだが……。

（ダメだな。女の子にとってはガラクタばかりだ、きっと）

と、引き出しを　めようと思った　間、セ　　ンで　まれた一　の

手を　つけた。

（　のおじさんからもらった　だ。たしか、なんとかの記念　手で、　った時は　だったけど、そのうち一万　ぐらいの　ちにはなる　、とか言っていたな。記念　手なんだから、記念にはちょうどいいかもな）

マモルは手紙と一　にその　手を　に入れてしっかりと　をした。に、　気が　ってきたので　リと　になった。

日　。マモルは　み時間のたん　にミーサに手紙を渡すチャンスをうかがった。

だが、彼女のまわりにはいつも　かがいて、ついに　を　ってし

まった。そして、　　後はミーサのお別れ　となった。国吉先生と
とんどの女の子がミーサに手紙やら　り物を手渡した。　の子は　も
が　　ったり、　　けあっているだけである。だから、マモル
は手紙を手渡す　気をますます出せずにいた。そうこうしているうち
にお別れ　も終わり、下校の時間となった。
（なんて　　なんだ、ボクは。最後のチャンスだというのに）
自分で自分が　いになろうとする　間、マモルは名　を思いついた。
（そうだ、先　りしてミーサの　の　便受けにいれればいいんだ！）
その夜　。マモルは　　して　　どころではなかった。　にも　ら
れずに　便受けに手紙を入れた時の　　がまだ　っていた。だが、そ

のせいばかりではなかった。今　ろミーサがあの手紙を読んでいる…
…と思うと、どうしても　　してしまうのであった。こんな　の
ときめきは生まれて　めてであった。ときめいた　が　ン　ンに　く
らんで　　のようになっていた。ところが　の　間、気になることが
かんだ。　好き　と書くべきところを 好 と書いたような気がする
のだ。　前、　　に 好き という字を書かされた時に、 好 だけ書い
て、 き を書き忘れたことがあった。しかも、 好 が下手す　て、ま
るで 女子 の字に　えると、クラスの　　に　われてしまったのであ
った。
（まさか、今　もあんな字を書いていたりして……だったら、まずい

）

ところが、もっとまずいことに気がついた。　にも便せんにも自分の名前を書かなかったことに今　ろ気がついたのだ。

（なんだよ！　それじゃ、　が出したかわかんないじゃないか、あーあ）

に、　の　の　気がシ　ーッと　けて　となってしまった。

マモルにとって、ミーサのいなくなった　年　はとても　しかった。でも、いつまでもションボリしていてもしょうがないので、元気を出して　にも　にも　中になった。

そんな日　が　いた一　　後、　に　るとマモルの机の上に手紙が
かれていた。
（ボクに手紙　　まさかミーサだったりして）
　　に　を　くらませて、まず手紙の　を　ると、上　護くんへ
と書かれていて、　返すと、そのまさかの まえしろミーサでーす と
いう文字がしっかりと書かれていた。　　に、また　の　　が　ン
ンに　くらんだ。そして、　いで　を開けた。　　らしい文字がマモ
ルの　に　　んだ。
へ　ー　、マモル元気　　も元気でがんばってるよ。やっと新しい
学校にも町にも　れたって　じかな。　だちもたくさんできたよ。名

護はいい　だよ。今度マモルも　　にきたらいいよ。ところで手紙ありがとうね。　　の　子で手紙もらったのマモルだけだよ。おまけにラブレターじゃん、完　に。でも、とてもうれしかった。てれくさかったけどね〉

（ボクだって、てれくさいよ。そうか、気がつけばラブレターというものを書いていたのかボクは。なんか変な　じだな。それにしても、なぜ手紙がボクのだとわかったんだろう　）

気になりながら、　の　を読むと、それに　えるかのような文　になっていた。

〈ところで、どうして手紙がマモルのだと気がついたか　りたい

そのわけを言うとね。まず、字が　タだった。　タす　た。あれぐらい　タな字を書くのは　　じゃマモルぐらいしかいないよ。それに、好き　の字が　女子　になっていた〉

（やっぱりな……）

マモルは　　ンと頭にゲン　　をした。

〈それに、まだあるの。それはね、手紙の漢字は　　タなのに、とつだけ上手に書けているのがあったの。なんだと思う。なんと名護の護の字。他の漢字より　しいはずなのに、なぜかその護の字がうまく書けているんだ。どうしてかなと思ったら、　は簡単、マモルの名前なんだよね、それって。いちばん書きなれている漢字だから上手な

んだね、きっと。そういうわけで　　はマモルってわけ。どうの　　、当たってた〉

（当たってたどころか、ス　　だな）

マモルは　心をした。そして、ますます彼女に　かれてしまった。しかし　時に　しさも　くなった。なにしろ、その彼女はもう　　にはいないし、この町にもいなくなったのだから……。マモルは手紙のきを読んだ。

〈ところで　手だけど、さっそく使わしてもらったよ。でも、どうせなら他のプレゼントの方がよかったな。　手だと　ったら終わりだもんね。でも、わがまま言っちゃいけないんだよね、　メン　メン。ど

うもありがとう。最後に、　もマモルのこと好きだったんだ。本当だよ。だから、新しい電話番　書いておくから電話して。　ってるからね。じゃ、とりあえず、さよおなら　ブッブーッ〉

（……）

マモルの思　　が一　マ　をした。だが、

（気がつけばこれだってラブレター　……）

と、　　が　　にこみ上　てきた。　の　　が　　に　ンク　前になった。ところが、　てよ　となった。　をもう一度　た。なんと、そこには　の　手が　られていた。

（　ジャビ　ーッ！）

分で　えていた方言が、頭の中で　ル　ルと　けめぐった。
しかし　　後には、
（なんでえ　、上　さ　）
と、別の方言がフ　ッと　かんだ。その　手に、どれだけの　ち
があろうと、それがきっかけでミーサが返　を出す気になったのかも
しれないのだから、これでいいのだと…。
そして　、
（てれくさいけど、ミーサに電話してみるか。これからは、モジモジ
しないで　気出さなくちゃな、よーし、フ　ト！）
と、ガッ　ー　をするマモルの前　を　から　き　んだ　がサッ

となでた。

（上）

ウソ発見器

サトル　ッ、　できたー、　くしなさーい

お　さんのはずんだ　とは　ゃくに、サトルは、　からおちつかなかった。それもそのはず。　タの中でも名　い　ルオ　に、マブ（　）　めをしてもらうことになったからだ。

マブ　めといっても、サトルにはなんのことだかよくわからないが、なんでも、ガジ　マルの　から　ちて、　手を　したことと　があるらしい。その時に　っくりしたサトルの　が、ストン！　と　の上に　け　ちたはずだ、とおじいちゃんがしつこくいうのだ。

そのせいで、ちか　ろのサトルはちっとも元気がないという。
（やばいことになった　！）
ルオ　といえば、　の　のおり　とはもちろん、　せん
のことから　の　格や　まで、　ン　シャとあててしまう　いお
ばあさんなのだ。
（ょっとしたら、　くの　も…）
がえをおえたサトルは、しぶしぶ　を出た。お　さんの車に
ると、　が　ン　ンと　った。
どうしたのサトル　オ　の　では、おまじないをするだけだか
ら、なにも心　はいらないのよ

だんから　タ　いをしているお　さんは、まるで　いもの気分で
ン　ルをに　っている。サトルはそれどころではなかった。おとと
いの生活の時間に、担任のケ　　先生が言ったことばで頭がいっぱい
だった。
先生は　　に大きな字を書いて、
みなさん　　る、　る、　る　ということわ　を　っていま
すか。　年生の　たちには少しむつかしいかも　れませんが、よくお
えておいてくださいね
そういってウソ発　　の話をした。けいさつ　にはウソ発　　とい
う便　な　があって、どんなにかくし　とをしても、ウソをついて

も、すぐにわかってしまうというのだ。
（　　ッ、おっかねえ！）
海　のように　　に　　た電　を　先や頭につなぐだけで、　の心の　きをいっし　んのうちに　　し、ウソを　やぶるのだ。
すべてのことは　　る、　　る、　　る　で、おてんとう　がみています。自分自　が　っています。ですから、　が　ていようといなかろうと、いつも　しいことをしましょうね
そういったとたん、クラス一わんぱくのケンタがいきなり　ち上がって、
ウソ発　　って、　ルオ　　といっしょだ、こわーい！

と、　　分に　んだ。そうだ、そうだ、こわーい！　とみんながさわ　だして　来、サトルには、ウソ発　　と　ルオ　　が、　じものに思えてならない…。

車　の　　をながめながらも、サトルは、ウソ発　　にかけられる自分の　だけを、思い　かべていた。

ルオ　　の　は、うっそうとした　の中にあった。大きなのまわりには、たくさんの　　や　　が　えられ、　チマのルが　　たいに　がっていた。

他にお　はなさそうね。サトル、ちょっとそこで　ってて

お　さんはそういって、オ　　の　へ入っていった。
サトルは、しばらくボーッとつっ　っていたが、すぐにたいくつしたので、シダや　ケの　りついた　　の中をの　きこんで　た。すると、　ーッとしたサトルの　い　が、　　に　らめいて　えた。
（オ　　は、いったいどうやって　くの　を拾うんだろう。どんな文をとなえるんだろう…それより、　くの　　を　さんが　ったら、がっかりするだろうな。　さんにはけっして心　をかけないって、さんと　したのに…）
サトルはいつのまにか、　の　チマの　ルにそって、　　にまわっていた。

（とーつ、たーつ、みっつ…この　チマのように、くの　も、
から　と　つかってしまうんだ。きっとそうだ。成　の悪い　の
ストを、　さんに　せずに　ててしまったこと。遠足の日に、大
いな　ーマンとにんじんを、そっと　にうめたこと。あやまって、
おじさんの新車に自転車をぶつけて　らん　りしていること。まだま
だある。　の　くで　玉を拾って、　って　ケットに　し
んでしまったこと…みんな　レてしまうんだ…）
サトルは、大きなためいきをついた。オ　の　を　と　りして、
もとの　のところでたたずんでいると、
何してるのサトルッ！、　く中に入りなさい

から、お　さんが　をの　かせていった。もう、あともどりはできない。

（どうか、オ　　の　　が　っていますように、ウソが　レませんように。これからは、か　　なたなくちゃんとやりますから）

をあおいで念じていると、　　の上のシーサー（　よけの子）が、　をむき出してサトルをにらみつけた。

（やっぱり、だめか）

サトルは、おそるおそるオ　　の　に足を　みいれた。

ーんとおせんこうのにおいがした。

オ　は、うす　いへやで、大きなぶつだんを　にすわっていた。チラッとこちらを　たが、サトルは　を合わさずに、お　さんのそばにチョ　ンとすわった。

じゃあ、はじめますよ

やおらサトルの手に　れたオ　は、　を　っているあたりに、もう一方の手をそえた。　ル　ル　うたいが　かれたサトルの手に、オ　の　が　中したとたん、ビリリッ！　と電気が　じ　うをかけ、オ　のこめかみが　クン！　と　いた。

（もうおしまいだ、ウソ発　につながれた）

しらが頭のオ　は、サトルのうでをにらみつけながら　文をとな

えた。
お　さん、この子のマブ　は　の下じゃなく、　中にもぐっている
ようじゃ
の中
手が　たいのは、そのせいじゃよ。　苦しさをうったえたり、とき
どき変な　をみたりするのは、マブ　が　の中にあるせいじゃ。最　、
お　れたことがあるはずじゃが、どうじゃな
サトルはオ　に　すえられ、　の前がまっ　になった。
どうなのサトル、お　えてないの
お　さんの　った　に、

あ、あのう、　シたちといっしょに　に　って…足がケ　レンして、下　におし　されそうになったんだ

ーダ　での出来　を、　ッと話してしまった。

とすると、この子のマブ　は、　のたもとあたりじゃな

タオ　は、二度三度うなずくと、　のある方　に向かって手を合わせ、またぶつぶつとなえた。

てっきり、ガジ　マルの　から　ちた時とばかり思っていましたのに…　んとに　かりました

お　さんは　たいの　を　ン　チで　ぐうと、何度もお　をのべた。

（いよいよ、　を明かす番だ　）

お　を一　のみ　したオ　　が　　を　して　りなおしたので、サトルはとっさに　がまえたが、

これは　んの気　ちです、オ　　さん

お　さんは　　をさし出し、　をあ　てしまった。サトルはめんくらった。

（くの　　は、いったいどうしたっていうんだ。何もいわないなんて変だ）

りの車に　っても、サトルは、　タオ　　ににらまれているような気がした。

二度とやんちゃをするんじゃないよ

る時のシ　シ　の　みもなんだか　　あり　で、　気　悪かった。

（オ　は、すべてお　しさ。　の　のようなあの　い　からは、もう　られやしない）

遠　かって　く　　をじっと　つめながら、サトルはそう思った。

やがて二　を　せた車は　の中を　け、海岸　いをくねって　の前に　いた。すでに日は　れ、　のかなたには　番　がまたたいていた。

…そう、そういうことだったのね。　直に話してくれてありがとう

サトルの　を　ったお　さんはがっかりするどころか、満足そうに　みを　かべていった。

らないの

サトルが　つんというと、

だれにだって　とつや　たつ、　に言えないことってあるものよ。それを、つつみ　さずうち明けたサトルはえらいわ。きっと、　国のお　さんも　んでいるはずよ

お　さんは、そういって　をうるませた。サトルは　ょうし　けした。

こんなことなら、もっと　く言えばよかった。心　してそんしちゃ

った

も心も　やかになったサトルは、　の　を開くやいなや、

おじいちゃん、ただいまーッ

と、　を　り上　たのだった。

（ウソ発　は、もうこり　り！）

（　城　）

二　くく話大　励

金色のヘビ

あるところに、ビたちの住む　がありました。小さな池の　とりで、　と　っこい　い　がころがり、ボウボウと　が　った場　でした。　ビたちはそこで、　ルや　ミなどを　らえて　べて　らしていました。

のことです。　が小さな池の　を　ラ　ラと　かせていました。　ビたちは　をチョ　チョ　させながら、　物を　していました。

池の　に大きな　が　っているのを一　のマムシが　つけました。

何かがこちらへ向かって　いできます。　ルでしょうか。マムシは
を　らさ　よう　かに　をくねらせて　ちかまえました。が、それは　ルの　方とは　っていました。　の先頭で　からの　いている物は、　く　って　えました。　でもありません。マムシは、ずいぶんと　くなってから、それが　ビの頭であることに気がつきました。それも　たこともないくらい大きな、　の頭です。そこには
な　を　めた二つの　が　いていました。
マムシの　れているところから、少し　れて、その　ビは岸にたどり　きました。　いできたのと　じ　さで、スルスルと　みの中へ入って　きます。　に　れた　が　め　めと　に　っています。頭

からしっ　までが　　みの中に　えていくまで、マムシは心の中で
つくりと　を　えました。
一、二、三、　、　、　、　、　、　、　一
それは、この　　に住む　ビたちの中で一番大きい　オダ　ショウの三　はありました。
ビたちは、そんなに　くない　　に住んでいるので、お　いのことを　っていました。たまに　を合わせれば　いね　とか　きょうは　ミを一　もみない　とか、そんなことを言い合うくらいの　でしたが、この時マムシは、これはみんなに　えてやった方がいいだろうと思いました。

それから少したったころ、　の　の　本で小さな　マ　ガシが　寝をしていました。かすかに葉の　れ合う　がするので、頭を上　てると、　の間から、大きな　　の　ビの頭が　　ッと　れました。マ　ガシがその大きさに　いて　ていると、　　の　ビも　マ　ガシに気　きました。そして　　その　を　マ　ガシに向かって大きく開けたのです。　マ　ガシは本当に　いて、思わず　の　っこの　い間に　り　んで、ブルブル　えました。

こんな　に、あちらこちらでたくさんの　ビたちがこの大きな　の　ビに出くわしました。そして　ビたちはお　いに　を合わすと、こんな話をしました。

たかい　あれを　たとも。どこから来たのか　らないが
の　ビなんて　めて　た　あんなに大きな　ビにも　ったことが
ない　なやつだ。　もせず、出　いがしらに　を開けてお
どかすんだから　つきも　だ　何しに来たのだろう
何日かたっても、　の　ビがこの　を出ていく　子がないので、
他の　ビたちはどんどん不　になってきました。　は　まって話を
するなどということのない　ビたちでしたが、もうこの　ろは、どこ
かで　かと　かが　の　ビの話をしていると、他の　ビも　わって、
ビの　のようになりました。ある日一　の　オダ　ショウがこん
なことを言いました。

だれか、あいつが　ルや　ミを　らえて　べるところを　たか

他の　ビたちは　を　合わせてから、かぶりを　りました。

どうもおかしい。あいつがこの　に来てからもう何日もたつが、物を　まえて　べるところを　たことがない　ここは　物がなのにな　何か他の物を　べているんだろうか

マムシがそう言ったとき、一　の　に、　の前で大きく開かれた　の　ビの　が　か　ました。　ビたちは大変な不　に　われて、みんな　をチョ　チョ　させました。

ビを　べるんだろうか

マ　ガシが　え入りそうな　で言いました。みんなの不　はもっと大きくなり、　が　しくチョ　チョ　と　きました。　べ物のなこの　　では信じられないことでしたが、どこかで　えた　ビがビを　うという話を聞いたことがありました。また、　ビを　にするビがいるという　も　にしたことがあります。

くの　みから　　ッ　という　とガサガサいう　が聞こえました。一　が思わず　を　くしていると、　みから　の　ビがガ　ッと　れました。その　からは　ミのおしりとしっ　が　えていました。それを　て他の　ビたちは一　　がとれたようでした。なんだやっぱり　ミを　べるのだ。これからこの　ミを　み

むだろう。みんなが　まっているところへ来たのだから、そのあと何か　でもするつもりかもしれない　と、みんなは　の　ビの　元を　って　つめていました。

ところが、　の　ビは　ミを　ッとはき出したのです。そして　つめている　ビたちの　うを向いて、　い大きな　を開けて頭をき出しました。

ビたちはもう　ねるようにして　を　し、てんでん　ラ　ラにりました。後ろを　り返る　もありません。ただもう必死に　のあいだを　って　って　ました。それ　れ頭の中で　やっぱりあいつは　ビを　うんだ　と　んでいました。

ちり　りになって　　た　ビたちは、その時　かが　　の　ビにらえられて　われたのか、みんな　　だったのかさえ分かりませんでした。それからは　　は不　と　　でいっぱいでした。　ビたちはなるべく物　で　を　めていました。　　に　えられなくなった時だけ、こっそり　き　って　　ルや　　ミを　まえて　べました。

何日かして、池の　とりで　オダ　ショウとマムシが出　いました。マムシは言いました。

か　われたって話は聞いたか　　いや、なるべく出　かないようにしているから分からん。だが、あいつはまだこの　　にいるらしい

オダ　ショウが　えました。
いったいいつまでこんな　うに　ソ　ソしていなければならないんだろう　そうだ。　れしているだけじゃダメだ。あいつをやっつける手だてを　えよう
二　がそう話しているところへ、別の　ビも何　かやってきました。みんなは　の　ビをやっつけるという　えに、だんだん　気がわいてくるような気がしました。
いくら　オダ　ショウの三　もある　ビだって、みんながかたまっていれば、　か一　を　まえて　み　むことはできないはずだ
オダ　ショウが言いました。

みんなで一　に　き付いて　め　してしまおう
マムシが言いました。
よし、頭　をそろえよう
そうして　ビたちは一　にかたまって　い　り、出　った　ビたちを　えていきました。みんな　ったりとお　いの　をくっつけていましたので、おおきな一　の　ビのようになっていました。　これならあいつも　くない、はやく　の　ビを　つけてやっつけたい　と思いました。
しばらく　くと、　い大きな　の　に　の　ビの　が　えました。先頭の　ビたちが　いた　と合　をしました。　子をうかがう

と、　の　ビは　ク　を　くでもなく、　　を　ャ　ャと
出していました。
よし、　ビを　えずにずいぶん　っているようだ。今だ
オダ　ショウがそう言うと、　ビたちは一　になったまま、
の　ビはビックリした　子でしたが、本当にかなり　っているようで、
っくりと頭をもた　、　ビたちに向かってまた大きな　い　を開け
ました。　ビたちは　む心を　えて、一　に　の　ビに　かかり、
それ　れにその　に　き付いて、　の　で　めつけました。
の　ビは苦しみのたうって　れました。　ビたちは上になろうと下に
なろうと　いっぱい　めつけて　しませんでした。

どのくらい時間がたったのか、　ビたちには分かりませんでした。
やがて、　の　ビは　　えて、　かなくなりました。　ビたちはこ
わ　わ　を　　の　　から　して、遠　きに　かなくなった大きな
ビを　めました。
あっ
、　の　ビの頭の　くにいた　オダ　ショウが　　ました。
大きく開いたままの　の中を　ています。
のどに大きなトゲがささっている
ビたちはこの時　めて　ったのです。　の　ビが　を開けて自
分たちに何を　えていたのかを。トゲはのどを　さ　、　物を　み

むことも、話すこともできなかったのです。

ビたちは自分の　した　ちに　れおののきました。でももう　いのです。

ビたちにできるのは、　きながらその場を　ることだけでした。

（　　子）